

一八八三年八月十八日(土)

バララームの家にて——見神の話

〔人生の目的〕

一八八三年八月十八日、バッドロ二日、土曜日。午後、タクールはバララームの家においでになった。タクールは神の化身の原理を理解させようとしていらつしやる。信者たちに向かって説明して下さる。

聖ラーマクリシュナ「神アツァクラーの化身は人々を導くために、信仰を持ち、信者に取り囲まれて、この世に生活していらつしやる。屋根の上において、階段を下ったり上ったりしているようなものだ。他の人々は、屋根に上るために信仰の道に励むわけだがね。とにかく、本当の智慧を得ないうちは、すべての欲を離れることは出来ないものだ。この世の欲望がみんななくなったらはじめて、屋根に上れるのだ。商人は、勘定が済まないうちは眠れない。帳面にちゃんと勘定を書きつけてから寝るんだよ！」

校長の方をお向きになつて——

「ジャンプすれば、きっと成功するよ！ 勇気を出してジャンプすれば、必ず成功するとも。

そうだ、ケーシャブ・センやシヴァナートたちの礼拝の仕方を、お前、どう思うかい？」

校長「はい。あなた様がおっしゃいましたように、あの方々は庭のことについては説明なさいますが、庭の持ち主に会うための話のごくわずかなさいません。おおよそ、庭のことについての説明が始めであり、終わりであるようです」

聖ラーマクリシュナ「その通り！ 庭の持ち主をさがして話をするのが肝心だ。神様にお会いすることが人生の目的なんだよ」(原典註)

バララムの家から、こんどはアダルの家に行つた。夕方になると、アダルの応接間で称名讃歌を歌われたり、踊られたりなされた。ヴァイシユナヴァ・チャランがキールタンを唱った。アダル、校長、ラカールたちが同席していた。

〔アダルの家でのキールタン——アダルへの教訓〕

キールタンが終わつてから、タクールは前三昧状態でお坐りになり、ラカールに話しかけられた。

「この場の状態(ありさま)は、スラボン月(七月八月、雨期の盛りの月)の雨水じゃない。スラボン月の雨水はザーザー降つてきてザーザー流れ去っていく。ここにあるのは大地から湧き出たシヴァ像だ。人手でこしらえたシヴァじゃないよ。お前、怒つて南神村(ドブキキシヨル)から出て行つたが、わたしは大実母(マ)にお願い

〔原典註〕 ああ！ 自己(アトマン)とは、見られるべき、聞かれるべき、考えられるべき、黙想されるべきものである。

—— プリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド 2・4・5 ——

1883年8月18日(土)

したよ。クマー、あの子の間違いをお許し下さい。って」

聖ラーマクリシュナは神の化身アヴァタールだろうか？ 地から湧き出たシヴァだろうか？

再び、前三昧の恍惚のなかで、アダルに向かっておっしゃる。

「むすこ！ お前が称名していたそれを瞑想しろ」

こう話されながら、アダルの舌を指でおさわりになって、舌の上に何か書きなぞって下さった。
アダルを入門イニシエートさせたのだろうか？